

病気の予防から治療後まで—コロナ禍での健康を考える—

健康生活講座(30)

4月18日に京都新聞文化ホール(京都市中京区)で「病気の予防から治療後まで—コロナ禍での健康を考える—」をテーマに京都新聞健康生活講座を開催しました。新型コロナウイルス感染症が流行し始めてから1年以上が経過した今も、医療を取り巻く状況は日々変化しています。その中でも、病気の向き合い方や、緩和ケアや脳・心臓の病気について専門の医師に話し合っていました。



京都新聞文化ホールで行われた健康生活講座。右から、清水正樹、清水鴻一郎、垣田寛人、横井宏和、原田昌子の各氏(京都市中京区)

胸部症状20分以上、救急車を

横井 宏和氏



リンを服用すれば、症状はすぐに治まります。心筋梗塞はカテーテル治療によって速やかに血流を回復させる必要があります。この場合は救急車を呼ぶべきという目安は、横井 20分以上続くような胸部症状があればためらわず救急車を要請したり、病院に行ったりしてください。

一虚血性心疾患について。横井 心臓に血液を供給する冠動脈に起こる血流障害の総称で、一般的に狭心症や心筋梗塞がよく知られています。狭心症は冠動脈の狭窄によって心臓が一時の酸素不足状態に陥る病気です。心筋梗塞は狭心症に比べて、心筋壊死が起るほど悪化した状態をいいます。狭心症は胸痛が数分から10分程度継続するのに対して、心筋梗塞は胸痛が完全に詰まっているため、狭心症よりも強い痛みが長く続きます。狭心症は血管拡張作用があるニトログリセ

パネリスト

- 京都桂病院 緩和ケア科 部長 清水 正樹氏
- 京都リハビリテーション病院 理事長 清水 鴻一郎氏
- シミス病院 脳神経外科 部長 垣田 寛人氏
- 洛和会宮病院 心臓内科 部長 横井 宏和氏
- 進行 フリーアナウンサー 原田 昌子氏

生活規則正しく適度な運動を

脳梗塞は時間との勝負

垣田 寛人氏



一病院での脳梗塞患者への対応は、

ば、tPAという血の塊を溶かす薬を投与します。この薬で初期の症状を軽減できれば、その後のリハビリによる身体機能の回復も順調に進むことが期待できます。tPA投与後も血管の閉塞が解消されない場合は血管内のカテーテル治療に移ります。カテーテルを足の付け根から脳へと進め、血の塊を吸い取ったり、ステントと呼ばれる金網でからめ取ったりします。

一病院で診察や医療行為を受ける際、患者が伝えるべきポイントは、横井 医師としては、最近受けた手術については詳しく知りたいですね。一刻を争うケースもありますので、家族や本人から聞くことができればスムーズに処置が進むと思います。

清水 正樹氏



一がん患者に対する緩和ケアの現状は、

清水正 緩和ケアというものが進行して治療の手段がなくなってきた人に寄り添うというイメージがあるが、がんになるしれません。確かに、ひと昔前まではそうでしたが、昨今

動脈瘤の有無、一度検査して

清水 鴻一郎氏



一出血性脳疾患は、

清水正 脳は血管が破れて出血した状態で、代表的なものとして脳出血と脳膜下出血です。脳出血は頭や顔のまわりの多くみられる病気で、患者は突然、激しい痛みが襲われることが多くあります。脳動脈瘤はある程度生れつきのもので、一度病院で動脈瘤があるかどうか確かめておくことが大切です。

一緩和ケアとは、清水正 緩和ケアは病気の種類を問わず、患者が抱えている苦しみや不安を和らげることを仕事としていいます。私が診察する患者の約9割はがんです。現在、日本人の3人に1人はがんで亡くなっている状態です。

一狭心症や心筋梗塞の診断や治療について、横井 心電図や心臓超音

いつている状態なので、一刻も早い処置が必要です。一横井 右の脳が左側、左の脳が右側の体をコントロールしている状態で、症状は右か左のどちらかにまよひやしれませんが現れます。例えば顔も明らかに左右で異なるようになり、まよひしている側では口と鼻のしわが浅くなり、口元は下がります。また、ろれつが回らなくなったり、言葉が出にくくなったりすることもあります。

波、CT(コンピュータ断層撮影装置)などを利用した検査の結果、狭心症や心筋梗塞が疑われたら、カテーテル検査を行います。カテーテルと呼ばれる医療用の細い管を手の血管に通し、冠動脈まで挿入します。造影剤を注入してエックス線撮影を行い、冠動脈の狭窄部や閉塞部を特定できれば、風船を送り込んで膨らませ、血管を広げます。その状態を維持する金属製の網状の筒を留置します。狭心症や心筋梗塞の原因は動脈硬化です。動脈硬化が進むと動脈壁にカルシウムが沈着する石灰化が起こります。石灰化した硬い狭径は通常の風船治療で広げることが難しいので、先端にダイヤモンドをちりばめたドリルを高速回転させて、石灰化した部分を削り取るロータリーターやダイヤモンドバックを用いた治療が必要になります。

緩和ケア、力合わせて解決を

一チームでケアすることも大事なのは、

清水正 はい。職種で支えきれない場面も、多くの専門家がご家族の力を合わせてほしいと思います。

一緩和ケアを受けることのメリットが多くなるように、最近ではがん治療に当てる全ての医師が緩和ケアの研修を受けることも義務付けられています。がんになるしれません。確かに、ひと昔前まではそうでしたが、昨今

一がん患者に対する緩和ケアの現状は、清水正 緩和ケアというものが進行して治療の手段がなくなってきた人に寄り添うというイメージがあるが、がんになるしれません。確かに、ひと昔前まではそうでしたが、昨今

一緩和ケアを受けることのメリットが多くなるように、最近ではがん治療に当てる全ての医師が緩和ケアの研修を受けることも義務付けられています。がんになるしれません。確かに、ひと昔前まではそうでしたが、昨今